

1. 5

「正直、もう良いだろ？」

……うえ……

「だって、オマエ遅刻したろ？」

……あう……

「良いな、オレ、帰るぞ？」

「でもでも……」

「でもはねエーっ！ ……ノゾミとでも一緒に行けばいいじゃねーか！」

「おうけい。ひゅーびごーっ」

ノリノリなのは良いんだけど、僕的には、ユカにもついてきてもらいたいなあー、何て、戻っちゃったりしているんだけど……やっぱり、駄目っすか？ 本当に、僕とノゾミさんだけで行くんすか？

——少女漫画研究部に入部しようと思っっている僕なんだけなあ……一人行くの不安だし、だからユカにはついてきてもらいたいんだけどな。

「無理言うな。面倒くさい上に、オレは新しいバイト先の面接もあるんだよ！ じゃあな」

——あ、行っちゃった。本当に帰っちゃった。

まあもう前の時点から言ってたもんね、バイトの面接があるって……僕の無理に付き合わせるのはやっぱり、嫌だよな……。ユカも色々あるし、頑張ってお金貯めて生活しないとイケないもんね！ よし、僕も一人で頑張るっす！

「ザツライト！ 人は、一人で生きなければならぬ……。だがフォアゲット、崩れる時は、マブダチ、居る」

「本当っすか？」

「イエス、5ごーごー」

……そうですよね、新しい環境で、新しい友達がもう二人も出来たんですから……今までユカに頼っていた分だけ、自分で頑張って、駄目になったら頼ろう！ うん！ そうだよ、ノゾミさんはそう言うっ

ているんですよね。

「ん、あー………いえ、す？」

アレ？ もしかして僕、勘違いしています？ う、うーん、まあ、もお良いです。とにかくそういう事にしておきます。

入学式も終わって、お昼にもならない午前中最後の一時間に、僕とノゾミさんは教室に残ってパンフレットを眺めていた。——パンフレットには学校の事が色々書いてあって、まあ、学校広いし、迷う人も居るみたいだから地図がのつかってる。僕たちはさつき迷いましたから、少しは覚えておかないとね。

文芸部とか手芸部とか、色々あるんだけど、やっぱり、少女漫画研究部だよな！ これがあるから入ったようなものだよな！ うん！ パンフレットによると、少女漫画研究部は、ここから歩いて行った別棟——つまり、部活専用の校舎みたいなのところの三階にあるとか。……この時代に珍しい、歴史ある木造建築……だそうです。え、でも学校自身でそんなに歴史ない比較的新しい学校じゃありませんでしたっけ？ うーん、でもそこ、深くツツこんじゃいけないところかもしれません。

あ、それよりノゾミさんはどこか部活に入るんですか？

「のー。ミイは誰にも縛られない生活を送るのサ——デイスイズ、フリーーダムっしゅッと！」

へえ、じゃあ部活には入らないんですね。他人が言うのも何だと思っんですけど、部活って、青春を謳歌する為のモノだと思っんですけど。だから、入っけていても無駄ではないと思っますよ。勿論、自分が気に入った、やりたい！ と思ったものじゃないと意味がないですけど。僕の場合、少女漫画研究部が一番やりたい事を出来る場所ですから、だから入部したいと思っているんですけどね。

おっと、ここからが部活棟ですね。わあ、随分と立派な木造建築ですね。わ、ギシギシ言ってる……

噂のウグイス張りですか。歴史を感じますねー、ま、この学校そんなに歴史がない比較的新しい学校ですけどね。さっきも言いましたけど。

ここの三階っすか。——さっつらいと、とかノゾミさんが言いそうですけど、あ、言わないんですね。本当に、ノゾミさんがどのタイミングで話をするのかわかりません。

そんなささやかな疑問は置いておいて、僕たちは足を動かして先に進んで行く。いっぱい扉が設置されてそれぞれに部活の名前が書かれている。中からはその部活独特の音とか、声とかが聞こえて賑やかか。毎日、部活棟ってこんなに賑やかなのかなあ？謎です。元氣よく部活をする事は良いと思いますけどね。……そう考えると、少女漫画研究部って……地味であまり声も出さないし、青春の気がしません——けど！僕にとってはやっぱり青春ですよ！

良いですよえー、少女漫画。ロマンですよ、男の子も、女の子も、是非読むべきですよ！そうです、研究部に入ったらまだ知らない名作を知る事にもなるんですよ！ あー、楽しみです！

ぎしり、と音を立てる廊下を歩く事二分弱で、僕とノゾミさんは一つの部室の前にたどり着く。勿論、その扉の真中には、『少女漫画研究部』って、大きく、細いカワイイ字で書かれています。——男の人、居るかなあ。うう、そう考えると緊張してきました。やっぱり一人で来なくて正解でした。二人で来て良かったです。まあ、ユカは居ないから、心強い、マブダチさんですけど。

……あ、アレ？ こ、ここでザツツライトとか言わないんですか！？ ちよ、ちよっと………そこでこそ言うべきところっすよ！ ノゾミさー——ん！？

……と、思ったら、ノゾミさん、そこで寝てます。横になっていないで、つまり、立ったまま、寝てます。いびきをかいて——いつから寝てるんですかね、本当にノゾミさんの事がわからなくなってきました

した。と、云うよりももう生態系から人間とはちょっと違うんじゃないだろうか、とか思っちゃいました……ごめんなさい、今のは酷かったです。

このまま立って寝かせているワケにも行きませんし、ま、ま、まずは……部室の扉を叩くところから始めましょう！

震える肩と、緊張でドキドキと音を立てる心臓。ついでに、ノゾミさんを抱えて重い肩——全てが、僕にとっては緊張の瞬間なんだと、思わせてくれる一瞬。ノックは静かに響いた。

……こん、こん。——しーん。

……誰も出てきません。ノックの音、聞こえなかったんですね？ 仕方ない、もう一度……

ノゾミさんを落とさないように、少し体制を整えてから、もう一度ノックをする。さっきよりも強く、大きく音が鳴るように、ノックを試してみた。乾いた音が響く。——中からは、やっぱり反応がない。

周りの部活の騒音に隠れて聞こえないのかな……仕方ない、扉を開いてみよう。中の人に何かを言われても……まあ、第一印象は悪くなってしまいかも知れませんが！ ちゃんと事情を話せばわかってくれます！ そう、大丈夫って、僕、信じてます！

部室の扉は、スライド式の扉で、隣の演芸室も同じ構造の扉です。でもさらにその隣の音楽室の扉は、ドアノブ式の扉。何で統一しなかったのかなあ、何て云う僕のささやかな疑問。どっちからが古いんだろうなあ、目の前の扉と隣の扉がスライド式なら、この二つの部室は多分同じ時期に出来たんだと思います。……つまり、この部室と隣の部室が昔に出来たのか、最近出来たのか、どっちか、ってワケですね。

——つと、そんな事はともかく！ 早く扉を開けて、入部届けを作りましょう！ そうしましゅう！ ノゾミさんをこれ以上背負っているのも少し

キツくなってきたので……正直な話、早く下ろした
いです、はい。

お行儀は悪いですけど、僕は、足を使ってスライ
ド式の扉をスライドさせると、部屋の中に入る。

……えーと……。何の冗談でしょう
かね……

そこには、何もない、ただの部屋が存在していた
だけなのでした！ そ、そんな！ もしかして、今
日は休みで、誰も居ないとかそんな感じでしょうか
……うーん、訊こうにも、ノゾミさんは寝ているし
そもそも知っているはずもないし。

このままノゾミさんを背負っていると、僕の方が
潰れちゃうので、ちよつと中で休ませていただく
します。おじやまします。

部屋の中は何もないと言っても、普段授業をする
時に座る椅子とか、パイプ椅子は三つほどあって、
細長のテーブルが一つだけポツン……、と置いてあ
る。部屋の端っこをみると、白くなっているところ
があって、何か、つい先日までそこに棚のようなも
のが置いてあったような事を思わせる。……本当に、
と、云うよりもちよつとホコリっぽい……っ！ け
ほっ！ 漫画はホコリだらけの部屋に置いておいち
やダメなんですよ！

背中に背負っているノゾミさんをパイプ椅子に座
らせて、肩の荷を下ろす。ふう、危なかったです。
そしてすぐに三つほどある同じパイプ椅子を持って
きて座っている横に一直線に並べると、ノゾミさん
を横にする。これでよし、つと。あとは……

「どうするか、ですよねー」

ホコリだらけの部屋はどう鼻目に視ても人が活
動出来るような状況じゃないし、何より、少女漫画
研究部のハズなのに、少女漫画は一冊もない。うー
ん、もしかして教室を間違えたとかないですよ
ねー？ 扉に張ってあった少女漫画研究部の張り紙を
確認して——やっぱりここですよ。部屋を移動
して別の場所においてあるとか……でしょうか？

パンフレットを取り出して確認をしても……うーん、
駄目！ やっぱりここであっているみたい。さすが
にパンフレットが間違っているとかそんな事はない
と思うから、真正正銘、少女漫画研究部は、この教
室で活動しているはずなんです！

うーん——と、悩む僕の目の前に……

「……なんだ、まだ人が居たのか？」

「あらら、ホントら」

……メガネを掛けた人と、赤髪が特徴の、お
つきな人が現れた。——あれ、このメガネの人、
どこかで見た事があるような気がします……

——僕の気のせいは置いておいて、もしかして、
少女漫画研究部の人でしょうか！？

「なーに言っちゃってるんだろうか……、ああ、そ
うか、一年生かあ……」それにしても

ぐい、つと、赤髪でおつきな人が、僕の顔に自分
の顔を近づけてくる。

「カワイイ顔してるね。本当に男？」

「うえ……あの、その……」

「黒髪——珍しいな、純正の日本人の血か……」
ぺろり、と舌を唇に這わせて、その人は僕を食い
入るように視つめる——だ、誰か助けてくださー
い！ ちよつと、拙い、感じですよ。はい。

「やめろ」

そこで、今まで寝ていたはずのノゾミさんが、よ
こからずいっと、割り込んでくる。た、助かりまし
た……

「おつとと……わりいわりい——」

「羨ノリし過ぎだ、オデイル。」

——キミたちは一年生だな」

隣の、メガネの人の質問に、僕は頷く。右側の方
を眺めると、「2」と描かれたシールが貼られてい
て……あ、二年生の方ですか……でもちよつと何か
違うような気がします、普通の二年生よりも——
失礼かも知れませんが、偉そうです。

「ここは今日から生徒会の所持物として、押収した

場所だ。許可なく入る事は許されていない。使用するのであれば、中心生徒会長である僕か、もしくは左翼生徒会長、右翼生徒会長に許可を貰う必要がある」

「え？ 今、この人、中心生徒会長、って言いましたか？ 今日の入学式で演説をしたり、生徒会中心主義のこの学院の事実上全ての特権を握っているとか何とかと噂の、あの中心生徒会長さん……ですか？」

「ああ。僕が中心生徒会長、織部イザベラだ」

「うわわっ！ す、すみませんでした！」

反射的に謝っちゃった！ 何だろう、この人って人の上に立つ人間として凄くふさわしい性格をしています！ オーラが……オーラがあります！

って、ここにその中心生徒会長さんがいて、そしてさっき生徒会の所持物として押収とか何とか言っていましたけど……うん？ 何か、嫌な予感がしますけど？

押収って、取り押さえるって事ですよ、つまり払うべきものを払えなくなったりとか、一定の契約条件を満たしていないからとか何とかで、提供物をそのままにしておく事が出来ない場合、取り押さえられるとかそんな意味合いの時に使われる押収で良いんですよ？ ——で、ここは少女漫画研究部の部室で……ああ。

「そうだ、理解が早いな、一年。パンフレットには載せていなかったが、少女漫画研究部は、部員不足、活動不足と、その他四つのハードルをクリア出来ずに、今年から廃部だ」

が—————っん！

資料をパラパラとめくりながら衝撃的事実を突きつける生徒会長さん。ま、まさか本当に、いや、予想以上の結果です。休部とかそんなじゃなくて、廃部、ですか！？

「休部の場合、人が集まれば、時間が経てばどうとでも活動再開が出来るが、それでまた好き勝手されて

は困る。だからこそその廃部処置だ。……ふん、当然の結果だ。

これでわかったな？ オマエが入ろうとしている少女漫画研究部は存在していない。諦めて別を当れ。ではな。行くぞ、オディール」

「はいはい。じゃ、また後輩。またどっかで、な」

が—————っん！

……ショックから立ち直るのに、カップラーメンが出来る時間要しました……まさか、廃部になっていたとは思ってもみませんでした……。うう、これからどうしよう。入る部活もなくなっちゃいましたし、ここはノゾミさんと同じく、ふりーだむ、な高校生活を過ごすとか考えちゃいます。でも、やっぱり高校に入ったら部活をやるうと心に決めていたので、少し抵抗があります。

じゃあ、別の部活に入るとしたら何に入るのが得策なんでしょう？ パンフレットを取り出して、部活一覧表に目を通す。パラパラとページをめくって、別の、僕に合いそうな部活は……と。

——あ、この『文芸部』なら僕でも出来そうです。活動内容は……よしっ！ 裁縫なら任せてください。

えーと、文芸部の部室は……四階の方にあるみたいですね。ここが三階ですから、この上ですか。上に視線を向けて、天井を視る。よし、じゃ、行きましょう！

ギンギシと音を立てる階段を再びのぼって、次の階層に急ぐ。最後の一段をのぼり終わって、ふう、と一つため息。辺りを見渡すと三階と構造は殆ど同じ。……でも四階はやっぱ一番騒がしいですね。音楽関係の部室は全部、四階に集中しているだけであって、本当に騒がしいです。ぶー、ぶー、ぶー、と何かを吹くような音、他にもシンバルを叩く、きー————、と耳に響く音——様々です。

ここですね、文芸部の部屋は。さつきみたいに消えていない事を祈ります。

ドアノブに手を掛けようとした時……

さわっ、と、甘いニオイがした。

「あ」

「うふえっ！」

——そこに、黒髪だけど日本人とは違った目の色をした、女の子が立っていて……ドアノブのところ、僕たちの手が重なっていました。ひゃあ！ 僕たちはすぐに手を放して一歩後ろに下が

る。
「ごごごごご、ごめんなさい！」

「ああああああ、あの！ 本当にごめんなさい！」

「いえ、あの僕の方が悪かったんで！」

「違います……その、私が……」

「僕です！」

「私が……」

「おうけい、ストップザタイム、時よストップッ！」

——っは！ にゃお！

「にゃあ！」

「にゃお！」

……ノゾミさんが止めてくれなかったら永遠にこの女の子とこうしているところでした！ 本当になりがとうございます。

「マブだろ、ミイたち。当然だっしゅ」

わざわざぐるぐるくるターンは必要ありませんけどね。

「おう……」

それはともかくとして、長い間、本当にすみませんでした、改めて謝ります。

「あ、はい。こつちも……その、女子中学に通っていたので、男の子と接するのはちよつと、恥ずかしくて……」

「そうなんですか！ それは本当にごめんなさい……」

……大丈夫ですか？」

「それは、はい。多分大丈夫です——少し、鳥肌が立っちゃいましたけど」

本当にごめんなさいです。

えーと、この扉の手前に居ると云う事は、文芸部に入る予定なんですか？」

「はい。中学の時も文芸部でしたし……あの——」

えーと……」

「僕、二ノ宮リンです」

「わ、私、ネム・リーです。よろしくお願ひします」

「この人が、僕のマブダチのノゾミさんです」

「ないすとう、ミイ、よろしくイエスタデイ」

「あの……えーと」

「気にしないでください。こうしないと会話が出来ないだけなんです」

「そうなんですか？」

「ざつっらいと」

親指をぐっ、と突き上げて、頷くノゾミさん。そのザツツライト！ を、もっと別のところで使って欲しかったのは内緒の話です。多分、ノゾミさん自身はそこまで気にしていないと思いますから。自分がノつた時に、やると思ってます。

それよりも、ネムさん、僕が名前を言う前に何か言いかけてましたよね？ 何ですか？

「えーと……二ノ宮くんも、文芸部に入るんですか？ ——その、男の子、なのに——」

「はい。面白いですよ、文芸。読書したり、裁縫したり——まさに「文」と「芸術」を奏でる、日本の部活ですよ！」

——まあ、本当は少女漫画研究会に入ろうと思つたんですけど、どうやら中心生徒会長さんに、廃部にさせられていました……」

あはは、本当に参っちゃいましたよ。でもまあこれも良い経験ですよ、うん。——と、僕はポジティブに考える事にしました。イエス、ポジティブ。ノー、ネガティブ……うう、少女漫画研究会……その為だけに、部活に入ろうと決心したのに。本当は人と付き合うのなんて、大変なのに、自分を変えたいと思つたから……せめて、好き

な少女漫画で変われたらなあ、って思ったのに、廃部だなんて。

「それわかります！ 私も、人付き合いが苦手で、どうしてもそれを変えたくて……っ！」

そ、そうなんですか！？ それじゃあ、僕たち、何か、似ていますね。

「はい。似た者、同士って事でしょうか？」

くすり、と、笑い合う。良かった、また、トモダチ出来そうです！

じゃあ、部室に入りましょうか？

「はい！」

扉を開けて、中に入ろうとすると――

「ブランシューーーーーーっ！ 助けてエー

ーーーーっ！」